

合同

No. 466

「地には平和があるように」

日本キリスト合同教会教師

工藤 利雄



「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」(ルカによる福音書2章14節)。

ロシアの侵攻後、民間人の避難の対応などに当たっているウクライナの副首相イリーナ・ベレシチュク氏に、NHKの国際報道2022の番組でインタビューした記事を読んで、心に残る言葉がありました。NHKのキャスターが、次のような質問をしました。「ウクライナの国民の命を守るために、この過酷な仕事の中であなたを支えているものは何でしょうか」。その質問に副首相は、次のように答えられました。「『希望』です。わたしを支えている原動力であり、精神的につらくても立ち直らせてくれるのは希望です。その希望をウクライナ国民と全世界と分かち合いたいと思っています。わたしたちを忘れないでください。世界には『真実が勝つ』という希望があることを、『平和的な解決ができる』という希望があることを知ってほしいのです。そして、もう少しだけ助けてほしいのです」と。「真実が勝利し平和が訪れる。希望があることを世界に知ってほしい」、このイリーナ・ベレシチュク副首相の言葉に深い感銘を受けました。ロシアとの戦争の中にあるウクライナの人々こそ、希望を持って「平和」を願っているのではないのでしょうか。わたしたち日本人は平和にどっぷり浸かっていて平和のありがたさが分かっていないのではないのでしょうか。

讃美歌112番「諸人こぞりて」の5節の歌詞で次のように歌われています。「平和のきみなる み子をむかえ、すくいぬしとぞ ほめたたえよ、ほめたたえよ ほめ、ほめたたえよ」。

主イエスが「平和の君」として、この地上に来られるというのです(イザヤ書9章5節)。主イエスがもたらす平和とは、どのような平和なのでしょう。その平和とは、単に戦争、争いのない状態を言うの

ではなく、神との正しい関係にある望ましい状態、すなわち神との平安の中にある平和です。この平和は、神との和解から生まれるのです。当然、人間は、神との和解がなければ、その間には平和を築けません。

何故、神のひとり子である主イエスが、この地上に人間として来られたのでしょうか。主イエスがこの地上に来られなければ、神と人間の間にある罪の問題を解決できなかったのです。この罪の問題とは、神が造られた最初人間アダムとエバが、神に従わずに罪を犯してしまったことです(創世記3章1～7節)。そのために、神との間の平和が壊れ、両者は敵対関係に陥ってしまったのです。そこで、敵対関係にある人間が再び神との平和を築けるようにするために、人間を神との正しい関係の中で生きられるようにしてくださったのです。その犠牲の生贄となられたのが主イエスです。それがゴルゴタの丘での十字架の処刑の出来事です。主イエスは、わたしたちの背きの罪を全て背負って十字架に掛かって死んでくださいました。そのことによって、わたしたちの罪は赦されて、神との間に和解が成立し、神は人間との間に平和を打ち立ててくださったのです。

ルカによる福音書には、主イエスが何者であるかを証しする人物が登場します。シメオンという人物です。シメオンは、聖霊に導かれて、幼きイエスと出会い、その幼子を見て神の救いの計画を悟るのです。そのとき、シメオンは神との平和の内にあることに気づかされたのです(シメオンの賛歌：ルカによる福音書2章29～32節)。

わたしたちは、聖餐式を通して、パンとぶどう液を食することで、イエス・キリストの十字架の死と復活によって、罪赦され救われたことを思い起こします。そして、神との平安の中にある平和を味わうのです。主イエスは、わたしたちに、真の平和を与えるために来てくださいました。神のひとり子イエス・キリストは、わたしたちに「平和」というプレゼントを与えてくださる希望なのです。罪の赦しによる救いこそが、人々に神の平和をもたらすのです。神は、全ての人に「平和」がもたらされるように、と願っているのです。